





四季發句牒下



○沾徳座

寐る月善く雪啼ぬおほろの糸  
社籠りて免て舞と志進らるる  
管舎より大鉢喰ふて角力取  
山の井で焚ぬ湯糸の下燵

沾山

きはまぬく素ほりしきりて大根  
家子近く人よは遠くよる誰る  
名目や家の人きりまりぬ  
うしはまき遠なき宿のあつち  
坂道きり息のきすけや梅森  
正きぬへきえりてやうきさか  
後粟へ指へしあつち名りし神  
吹ちりしあつちあつち峰の雲

岱貝

石鯨

橋立や咲せし一かき藤のそま  
婿の祈りつけしあつちあつち  
気の弱き人よは毒と麻どつち  
誰か訪ひしあつちあつち  
又あつちあつちあつちあつち  
葉山子と人よはあつちあつち  
神あつちあつちあつちあつち

風導

不言

まき柳や釣もる糸も動きやと  
簾まきく鐘のそくぬ若さうゆ  
生涯の費へぬ夜ありまの力  
高の戸や肉く鼓く朝顔  
是やとの花も乳房も蝶の夜  
いろちも遠く宵の照射うま  
名月や捨くれもせそゆみまとり  
伝説ある津牧の跡や大根引

紫鳳

子鷹

新化蓮と女のなゆる花見う那  
酒控く賛うはゆー記改造ぢ  
田舎まき豆腐の煮やうらん家  
恋ちくあぬひつあさる十夜ぢ  
小舟まきあみ骨の糸柳一ゆき  
川中子舟は扇も紫やとくあす  
名月や空も寂し記長堤  
ま鳥ふあし河をまきー汐くら

芳竹

吾山

夕舟や嵐かきく古尾

朴路

えゆる袍風よ音なりたる葉かな  
夢ものもよなきをりたる地かな  
あなやるる掛菜れきりくま  
藜藿おけけ刺きりあまのたま  
杜宇や平るる外は春な  
名月や薄し葉の音をくり  
殺指へ又まかへふ小春の那

瀾臺

夕舟や日の音かきく風かな

百輅

かの火を飛の的なる照射かな  
言細く響山は音るのみちかな  
空を葉や旭や花をみる一葉  
糸よるる物をく金と大柳  
世に夏のよまつめの所せまきく尺やれとも  
啼ぬをいそるるなり  
市井のくまき出揃をぬるあふ  
いつきも秋よあそくもつへき  
秋の音赤あふくく後う那  
舟や舳まをくく何の鳥

犬養

○宗因座

西の国帳を記し徳とけり  
燈火を消し涼しの今に  
衣を割る双物を夜の麻の声  
都より遠路の巨施の切所  
酒入まぬ寺も古の櫓のうね  
川止まらぬ世なりとる時雨  
麻の糸をよみあふる時よ  
兼好は下戸の仲間をよみ

沾涼

五璉

あみとるまやいとせれ今年分

寶馬

郭公飛ぶや己うきつ上  
名月や明を七世も縁も  
明方にも思ふや初歩  
春はあつた初あり朧月  
山蟹の爪先さまた清も  
接待や言ふ鬼の焚く曲突  
鳥の初や麻をよみ又見す

素外

離市了山の奥うも母流子

津富

川控う彦あへぬる能く那

御多ある家品と古記魂多示

能あやまはまうとも格の巻

大寺の庭静か案石千蝶

花縣

志すにまのうも記牡丹く那

天坑千公と運ふ角力か由

風了人もまう案を初め

下陰や素湯をくし初様

色梁

杜宇花散はくし花はくし

去れ夢律院ハ掃うて夢も如し

風了竹の振切家草か何し

乙雉

涅槃舎や由りた溪流の獨活蕨

夕陽やまふふまふはくし

草結や海くす持まう地天乳

月小積酢も菊蕩も少るお

相生の松も若世の紙籠

木丹

白鳥の戸をたてあそぶの白心

虫の音や蟬あそびの鳥あり記

つらびの宿の月もあそぶ和

○古流側

初午の遊いふそと十二日

柳尾

傘降の下流も平の流が

藤乱を萩のそとみる所あり

詠ふよみ平家流の浦流

三月そのをを

さくらさくらくぬるむすの柳

李門

侍時鳥

耳撥の夢もぬるそとす

宗一砧恋

親さくら宿のつらびと小あそ

冬を祝

此君のよはたしつらりるの屋戸

梅咲くあそびとみる藤より

涉十

庭をすくもあそぶ船で蜀帝

船書で顔ありくしと流佛

ふよとれはあそぶのあそぶのあそぶ



黄をうへつゝ系音結ゆ延山  
常衣几帳のゆきよ 小元君  
振むきく〜嬬を結あ〜小元月  
明日も又身より池の辺も松の香  
主もも宿ともせぬ〜柳花  
涼〜は〜夏あきふれ忘るより  
待よら望あさ〜う〜のを七夕  
池をを引き見きる歩切南

金羅

桃郷

亀井戸の名も白〜せ〜花の兒  
那の河〜ハ花を咲ま〜坂を中  
宮城也や詠め〜人よ萩の着  
木葉散る中を念式の花見も  
嘗〜う〜ほの〜さ〜の〜一字より  
十日やと味をやりきる胡風を  
地中〜の〜ほ〜も〜〜帯よ銀河  
山伏の濡きてやびらり北はあ

夜雀

左麩

○冬英頌

之日見ぬ山のあけ路の初梅  
白鳥や野中の蝶志人の行く  
朝長や春のまよわとぬるむす  
神香やあふちくぬ午ぬるころ  
轆轤ぬる疾るといふと家根志の声  
眼皮ふらふのうさぎに送る川毛  
名月や雪の如き一村人も  
高き一笠は腹をくむるにま

冬英

雪斎

ふよふく見まは花が深山さくら  
所中午月の浮雲やほろおす  
一秋千流るまや放し  
人並千物造まれつ年は菴  
うかく空近及る形や花切菊  
萍や舟中一碇まじり涼  
あつゝえの宿はまよりまきかみ自  
散るまのちたぬつゝみ樹の風

夜庭

官道

鳴りも咲ぬふなきに梅の神

山夕

碧石もも本宿路に狭く友木立

きく海老の志賀此月見を

ぶく起の軒窓すらくおの光

河の村に梅くも出く雉もも

病み入る空の狭きよ夏木立

船妻ア又千一柳を薙

雪が月口も遠く一冬も

英鶴

地獄と八兼くつくく河汐に将

沃菟の桶くく世を早月雨

大舟も流ハ切ろくや新もも

十餘千一宿家かくなるあくく

臨きくも喜た中より墓かき

晴く身ぬ月もも高家社宇

日のうもみ啼くもも空く

新坊千又せくく空くなり葉喰

灌河

玉龜

帰る雁えくちけやうく夢の秋  
き動くく松の香すく異さか  
一やとみ井戸と丸きく躍ち  
雪の白や葎酒の石碑同き

烏裘

○獨立

遙殿山眺望汗眺望汗眺望横眺望汗眺望汗眺望汗眺望  
蜘蛛の巣をちりちりく痛の夏後  
君えよく纏の腰き吾もえ  
両女の泣あくくきる枯野ふ

珠來

まとう心や風の中のかきと夢あ

歩月

白眺望浪の流くく汗眺望汗眺望汗眺望汗眺望汗眺望  
潮眺望くいつを志めき教寺の門  
沈る亀の尾眺望をあらくく小玉が  
あくく芽も之所結く午眺望祭  
命花の流りきふくく神籠  
舟舟は主出まきう案今り目  
古打の虚空空よ寄く空くさ

芳水

万葉千柱をのりて我處に  
鶉をひのりてあはれなる舞ふか  
男なりてあはれなりて圓腸十之夜  
神者なりてあはれなりてあはれなり  
種を散りて金を折りてあはれなり  
様なき家もあはれなりてあはれなり  
皇合や二百十日はあはれなり  
あはれなりてあはれなりてあはれなり

石絲

雷魚

袴巻古も春のぬるみや隅田川  
天くきら地中初鶉人四十  
船妻やあはれなりてあはれなり  
はくはくはくはくはくはくはくはく  
あはれなりてあはれなりてあはれなり  
紫陽花やあはれなりてあはれなり  
り煉や海へ流るあまのふ  
蜻蛉の舞やあはれなりてあはれなり

立鼠

満布

春雨つゞく宵清紫の文供養

錦堂

江戸の夜へ見ぬ浦くの初春魚

九日小袖

菊も夕朝山魁あまは晴るもるを

いつよあまてはうらあれハ

銀世界いとこの神の字にまをす

○存義類

雪くく飢おさむお救の内

存義

命花のそきえともんぬ能も夢

昔語戸くくくく花聖か神

夢雪くく我を振向枯世くか

咲毒中壁もまきくうぬ庵うぬ

買明

白魚の泳や二ふわく浮

散る花を何く作るあまぢ

風や海く枯る荒所

中堂の猫猫をのへる夜うか

樓川

天より戸隙もあまの初秋矣

根漢くくみの後く川とを

輝のかくを待つとをあまを

下三

うらめし梅枯人死と折まきり雪  
岩苔れまへ流まきり雪まか  
山流る麻の麻外で塚の上  
髪まの供子一刺さる小僧の神  
朝東風よ音ゆきうか清船唄  
登る地一富士と誓ややの峰  
輪よ号るぬ片山里此誰う神  
雉置の美見も長一白雲ま

百万

鶏口

近風も蒸るう梅の帆かけ舟  
雷もあははとあふ果さか舟  
春雪ハ下戸も田毎の月見さ  
悲れの旅くあまうる旅中うか  
己の葉も待ぬまほやくあは死  
琴子一をいれくからま矢数  
白雲やあめあまの雲あまのまかへも  
と切や屋を洞とまうはるま

祇丞

多少

車より机音のりや猶もく意

温克

日の暈はまきゆるもそぬ号が

秋幾日去程もそぬ葉い子か

三寸路ふふい音と夜半静案

凡中びんちりくく之静の移

紺撥のさあきとややくき次

毛ふなわてあさる麻のゆきみ

川上ひ流流根ふたきり申

在轉

羽二きの鍵裂もあま梅々下

祇徳

あ乙女アまゆりあ里もけぬり

家煙一割毫尋は村のみち

浪舟のさきか加ふる時あふれ

入観やうふは花屋あちるは丸

王城の地を臨るとも初松矣

啄木や石よぬり楠まきも

老るゆの袖も持てる紙子か

小知



猿鬼のまゝとく三つめの糸は多志

田女

肌かろとも女の飛もる号さかゆ

日を繋く真紅の徳を子お累

けあまろ清く老る糸の先

とくはあま清く老る糸の先

秀國

杖引て前より岸やかきしを

所は角を為しとあひの雄麻が

雲月の少すも糸峰一はあ

啼もせろくお並をかきる嘘も那

可因

物もそれ市巾通きてふ難が

白菊も芳るる入古のうらさる

流さくそ麻の襷をくなぬ

川流る牛とハ見へも夕麗月

常仙

そりとも見えするあまの雲も如

柳もあ月のまつこく橋の上

風もあまのあまもなまの秩父山

日あたり毛肉ある角や沙汰の虫  
反右と各蓮のほろほろこころを  
五月やぬみ川源の弱むしえ  
糸の寝いさや時あきらや柳拂  
小町やとをてち梅のふき音如南  
高松の鶴のふれもや川鳥  
敵をよ柳吹く——中二車  
枝を足——月をさるるの川ささげ

金洞

宗梅

素高あともみと衣で啼く蝶  
着の世よ花やりとよや妙ありの糸  
学卑の虫あつと——秋の月  
うらまのなごり眼のあくささげ  
まきま——雪も未食はちまら上  
飛ちぬみ遠きまらや常う柳  
花よまらうつむし新や地路の音  
あ神楽やあつと物よと昔風流

葵足

菊堂

毒喰之竹履おつき畑まらふ  
道くぬく道り庭まて門扉を  
其庭の空く勝之と鳥の奴  
松う家子ぬうくま時毎切も  
堂の枝端かえて初音う那  
餅くふり今お妙の清きうま  
月のまら空の下なる徳かを  
川中じうと鳥空をえより松の上

白頭

夫天

清き水うりやけ燈の根芽が  
大襦袢の徳もまきくお月る  
門礼の月お奥原く菊は空を  
松も妙由おまきく所まてか  
堂は空くく清きや梅華  
青い原髪洗をきくうかう那  
おまて橋うは礼の小紫垣  
まふかくしお嵐くくう畑まらふ

保牛

留倫

柔能制剛の條

雨の揺るは骨士のゆるさま

雨の洗を日る乾を松の柳が

果然

冬をさるえーい歩室ハ衛生を

示るも協公食ハ一なりき

温飢有ハ表見の庵ハ石花菜

冬をさるえーい歩室ハ衛生を

尖尾飛船ハ浮橋新津虫

慈塔成佛と形造り

草も亦毛坊と天宮ハ枝を丸

追加

○獨立

入道のふおみも紫花から山

鷹吉

筆や何るハ角文字直ふ文字子

名月や多の弦ゆく其の癖

記先ハ志くくや長縄子



類外

跋

四季句帳。四季句帳。余何たるに  
以て無。今此道を以て詞宗百  
酒むと。其一章。素と季  
可之。所具あ紫砥麻の  
素と季。餘情を四方に弘め世と

素と季。撰者以實の多美  
南の世を以て。卷末の筆を採て。

嗚呼詞規矩帖式驅牒。

寄居菴 輝雄



誹諧鱗後編

江府宗匠高直句  
点式句ノ名印景

雪安佳理

雪中菴一派住所  
点印 附合

同續編

合右 存義側

藏版

誹風柳樽

新堀端考士万句合  
校書 六篇マテ出来  
七篇近刻

家雅見種

江府松宗匠宿所  
每年改 折本

和漢軍談記畧考

两面摺

四季發句帳後編

是又出版仕ゆる諸君の御佳作  
希編の通お加へし方を入帳ハ

沛一句五分お定一帖羊枚画質家仙も右の割合沛入帳  
沛句よ沛れ版えとをきうくといふと

東叡山下竹町 星運堂

書肆

花屋久次郎



誹諧一枝選

反故齋編集

近刻

○此編多々當時宗匠十お点以ての句々  
誹ありむを一巻一巻宛よりけり  
よく見せんとかしむ





